

マレーシア国サバ州にてのワークキャンプ

荒武友子

私が今回参加した CFF マレーシアのワークキャンプは、ボルネオ島サバ州にて厳しい立場に置かれている子どもたちが安心して生活し、より豊かな未来を築いていけるよう支援する「子どもの家」の建設を目的としている。マレーシアは現在、2020年までに先進国入りを目指して経済発展を続けているが、フィリピン、インドネシアと国境が隣接するボルネオ島サバ州では、移民問題、貧困問題、社会福祉や教育の制度が行き届かないことによる弊害、宗教や民族の違いによる差別や偏見などの問題が取り残されている。このような問題が原因となり学校に行けず食事すら十分に得ることができない、未来を望むことが難しい子どもたちがたくさんいるのが現状である。「子どもの家」は子どもにとってより良い育成モデルであり、路上で寝ている子どもたちの未来を築くと同時に、世界の未来を築くことにつながる。子どもの未来を築くといったキャンプの目的に共感し、参加しようと決心した。

CFF のワークキャンプは、日本から参加する日本人キャンパー以外に現地キャンパーも参加することができ、異文化交流を深める国際交流のキャンプになっている。私が参加したマレーシア第6回のワークキャンプには、22人の日本人キャンパーと共に5人のマレーシア人キャンパーが参加した。キャンプのプログラムは大きく分けて3つの活動が含まれていた。第一にスタディツアー、第二にワーク、そして第三にホームステイである。キャンプの期間は3月9日から20日までの12日間である。

スタディツアーは私たち日本人キャンパー全員がマレーシアに集まった日の翌日、3月10日に行われた。まず障害を持つ子どもたちが通う福祉施設を訪問した。さまざまな障害を持つ子どもたちが、社会に対応し安全に生活していくことを手助けする個別支援プログラムが設備されていて、子どもたちを援助する人材を育成する看護学校もあった。この施設に通う子どもたちは3ヶ月に一回学習能力を確認するテストを受け、教師と親がその結果にそって話し合いを行い、個別のプログラムを調整していくシステムになっている。子どもたちはとても元気で、それぞれが頑張っている姿はとても印象的だった。しかし、この施設を利用するには多額の費用が必要であって、通える子どもたちはほんの少数であることが現実である。次に不法移民が集まる集落に行った。この集落はコナキタバルの都心近辺に位置する。集落で生活をする人々は主にフィリピン・ミンダナオ島から移民してきたフィリピン人である。ミンダナオ島は反政府勢力による紛争が長く続き、政情と治安が不安定になった結果多くの人々が近い位置関係にあるボルネオ島のマレーシア・サバ州に入国するようになった。歴史的にもこの地域の交流は頻繁で、15世紀前後はスルー王国として統一していた。スペインやイギリスなどの植民地勢力の支配下に入り、その後現在のマレーシアとフィリピンとして独立したが、スルー王国の歴史的経緯を踏まえフィリピン側には今もサバ州の領有権を主張する動きがある。移民の中には今もなおスルー王国であったときの意識を持ち、なぜ自分たちは不法移民扱いされているのか理解に苦しむ人々がいる。一方でマレーシア政府は2008年にサバ州に不法滞在している外国人の大量強制退去計画を発表した。集落に

は以前あったと思われる家屋が崩壊した跡が残っていて、殺伐とした風景であった。しかしそんな殺風景の中でも子どもたちは外国人である私たちを満面の笑顔で迎えてくれた。集落には数えきれないほどの子どもがいた。親が不法移民であることによって国籍を持たない子どもたちは学校に行けず、体調を崩しても治療を受けることができない。いつ再び政府勢力に追い出されるかわからない恐怖を抱えながらも、互いに支え合い生きている姿は衝撃的だった。厳しい状況に置かれていても、私たち日本人よりはるかに心が豊かで目がキラキラしていた。



スタディツアーの締めくくりに Petagas Memorial Garden に行った。Petagas Memorial Garden とは第二次世界大戦に日本軍との戦いにて戦没したマレー兵士の名前が刻まれている記念碑が立つ庭園である。戦死したマレー人の多くがキナバル・ゲリラ兵（通称 “The Kinabalu Guerillas”）の兵士であった。彼らのほとんどが戦場の経験がなく、急に潜入してきた日本勢から国家を守ろうと団結し必死に戦った若者であった。1944年1月21日に約176人のマレー兵士が日本軍によって殺された。毎年1月21日には慰霊祭が行われている。日本政府は未だに国が戦中に犯した罪、そしてサバ州にもたらした苦しみや悲しみに対してお詫びの意を示していない。慰霊祭にも一度も参加せず、自ら犯した過ちを水に流そうとしている。広島と長崎に落ちた原爆に対してマレー人は「グンビーラ！」と喜んだそうだ。原爆が落ちていなければ戦争は終わらず、日本軍の潜入によってマレー人はもっと苦しんだであろうと考える人は今でも少なくはないと思う。国家のイメージやアイデンティティーが汚されるのを恐れ自分らの過去をはっきり表に認めない日本は、平和憲法を持つ「平和の国」としての名を掲げて良いのだろうか。日本の教育だけでは学べないことにたくさん気付かされた1日だった。

スタディツアーを終え、翌日に CFF マレーシアのワークが開始された。「子どもの家」の建設予定地は、サバ州の州都コタ・キナバルから車でおよそ1.5時間南西に走ったパパールの果樹園に囲まれた場所にあり、敷地面積は1万8,000坪である。ワークは午前8時半から12時半頃、午後2時から5時半頃に行われた。3月はボルネオ島・サバ州の雨期で、ワーク中はよく雨に悩まされた。熱帯雨林地域のスコールは降ったり止んだり1日に何度も続くと共に、雨雲が引いた後の太陽の日差しは痛いほど暑かった。温度差が激しい環境の中、たくさん水分補給をしてこまめに休憩を取るよう心掛けワークを進めた。無理している人はいないか、顔色が悪い人はい

ないかなどと常に周りに気を配り、皆助け合ってワークができた。今回第6回キャンプのワークは洪水によって破壊された道路の基盤作りとフェンスづくりの2つであった。崩壊された道路は敷地内への入口から繋がる道であり、この修理無しでは子どもたちを受け入れることができないという状態だった。まず崩壊された道路の土をきれいに掘り地面を固め、石とコンクリートを交互に敷き詰めていくという作業だった。道が埋まった後、レンガとくずしたタイルを使って道路に第6回キャンプを示す「6」を大きく描き作業が終了した。第7回キャンプの時にはもう子どもたちが CFF マレーシアで生活をしているようだ。同時に行われたフェンス作りは非常に地道でチームワークを必要とする作業だった。私たちは150メートル分のフェンスを立てることができた。しかしこの150メートルが全体のほんの一部にも満たないと考えると、「子どもの家」建設プロジェクトの壮大さを染み染みに感じた。



ボルネオ島・マレーシアの村人の生活を経験するためワークから一度離れ、マレーの家庭でホームステイをさせてもらった。3、4人のグループに分けられ、2泊3日ホームステイ先で生活をした。私は現地キャンパーかつワークスーパーバイザーであるフレッドのお兄さんの家に行った。フレッドの住む場所にはフレッドの家族の家、お兄さんの家庭の家、フレッドの従兄の家庭の家の3世帯集まっていた。フレッドの家族では18歳であるフレッドが末っ子で、お兄さんの家庭

には1歳の男の子、3歳と4歳の女の子、6歳と8歳の男の子がいた。皆とても素直で人懐っこく、一緒にたくさん遊ぶことができた。始めて会う人にでもすぐ抱きつき、たとえ外国人であっても笑顔で迎え入れてくれるということは現代の日本ではめったにないことだと思う。都会から離れたマレーシアの家は竹で建てられた高床式の家で、家族、また友人同士が協力し合って建てるそうだ。バンブーハウスは風通しがとてもよかった。しかしあちらこちらに虫がさまよっていて、初めは戸惑ったがすぐに慣れた。寝どころにありの群れがいるということは当たり前だった。日中の活動および食事はフレッドの家にホームステイしているフループと一緒に行動した。夕方から訪問した一日目は夜ごはんを食べた後、歌を歌ったり踊ったりしてゆったりとした時間を過ごした。フレッドの家にはよく近所に住む友人が集り持ちあったお酒を飲みながらカードゲームをするそうだ。大きなおなかをしたフレッドのお父さんはその中でもボスの存在であり、お酒を飲みながらひたすらテレビを見つめ家族の様子を見守る感じで居座っていた。2日目は朝からお昼過ぎまで都心にあるマーケットに行った。マーケットと言ってもお店の数は少なく、同じようなお店が何件か集まっている商店街のようだった。フレッドの家に戻りお昼ごはんを食べ再びゆったりとした時間を過ごした後、ジャングルの奥にある滝に行きマンディー（水浴びおよびお風呂）をした。村人の洗濯場兼お風呂は川である。CFF マレーシアの敷地内でもキャンパーは皆川でマンディーをして12日間を過ごした。夜ごはんを食べた後は外でBBQをし、空を敷き詰める星の下で夜中まで歌い、フレッドの家族、近所の友人、子どもたちと楽しい時間を過ごすことができた。知り合ったマレー人は皆マイペースでくつろいだ雰囲気は常に漂っていた。家族と友人らで協力し合い、欲を押し付けず互いに尊重し合った生活であった。また子どもたちは自分でできることは自分でやり、年上の子は年下の兄弟の面倒を見るという習慣が自然にできていた。親や年上の人やっていることを見習い進んでお手伝いをしている姿はとても輝いていた。



たった12日間のキャンプだったが、たくさん考え、たくさん学び、人生においてさまざまな「気づき」を得ることが出来た。マレーシアの社会問題や歴史に触れ、知識を深めると同時に社会の在り方や個人の人権、また心の豊かさについても考えた。マレーシアでは日本以上に貧困、差別、人権など社会のさまざまな分野が問題視されているのにも関わらず、なぜ人々は心豊かに生活していけるのだろうか。教育や医療保障以前に、まともに食事が取れず住む場所も不安定である人たちがなぜあんなにも笑顔で生きていけるのだろうか。厳しい状況に置かれていても人々

は互いを愛し認め合うこと、そして支え合うことを大切に生きている姿が印象的だった。自分でははっきりとした答えはないが、心の豊かさの根本は「ひとを愛する気持ち」なのではないかと思う。忙しい日本の生活から離れ、ありのままの自分でキャンパーと接し、先入観にとらわれずにマレーシアと向き合うことができた 12 日間はとても貴重な経験となった。この経験は自分を見直すきっかけ、また将来のビジョンを描く際の刺激になると思う。



—マレーシアの空—